

絵画の中のはきもの

道具箱のファンタジー

見一 眞理子

父の仕事場には今もたくさんの道具がそのまま引き出しや道具箱に収まっています。既に4年も経っているのに何故か処分する気持ちにはなれず、とって主人を失った道具たちはどうしていいのか中途半端な存在に困惑しているのではと思います。父が現役だった頃の仕事場は、職人の領域を汚してはいけないというか、一種独特の空気感で満ちていました。手に取って眺めることが出来るようになった今でも道具の並びや種類を置き換えたり、移動したりしてはいけないようで、いまだに整理できない状態です。道具たちはみな使っているうちにすり減った丸みをおびて鈍色に光り、父の生きた証のような気がするのです。

私が作品の中に描き込んできた道具は金槌（ポンポン）、ワニ、釘抜き、包丁、穴ボコや台金…すくい針の類は「これってどんな工程に使うのかしら？」と種類の多さに圧倒されてしまいます。それぞれが靴を創りだすために必要なかたちで本当に美しい・・・そう、やっぱり一度でいいから父から靴作りを教わりたかったなあと悔やまれます。

私が絵を描くこともやはり手の仕事、筆やパレットナイフなど靴作りの道具の種類が多さとは比較になりませんが、使い勝手がいいように自分で加工したり、このメーカーじゃないと駄目といったこだわりが生まれるもので、きっと靴職人さんそれぞれの使い勝手から个性的なかたちになっているのだと思います。

しかし、道具は使ってこそそのもの、このまま眺めているだけでは可愛いそうで申し訳ない気持ちになります。『ドイツ八方ミシン』と父が呼んでいたミシンだけは、私も教わりながら革の切れ端を利用して手提げ袋や小物入れを作るのに使った経験がありますが、今は寂しく部屋の片隅に置かれています。

昔から西洋の童話や絵本には靴屋さんが主人公の物語が多いのは何故でしょう。父の仕事場に居るとふとそんなことを思ってしまうような、父の遺した道具箱には何かが潜んでいるようなけいを感じます。グリム童話の『小人の靴屋』のように、今でも夜中に小さな職人となってこれらの道具を使っているかも知れません。これって娘のささやかな妄想でしょうか？



木型の森のこびと